

1. 文学部

I	文学部の教育目的と特徴	1 - 2
II	分析項目ごとの水準の判断	1 - 4
	分析項目 I 教育の実施体制	1 - 4
	分析項目 II 教育内容	1 - 8
	分析項目 III 教育方法	1 - 12
	分析項目 IV 学業の成果	1 - 19
	分析項目 V 進路・就職の状況	1 - 23
III	質の向上度の判断	1 - 26

I 文学部の教育目的と特徴

- 1 文学部は、哲学・歴史学・文学・人文科学の視点から人間の在り方の全体を捉える知の営みに触れることを通して、適切な思考力と表現力、総合的なものの見方を身につけた人材を養成することを目的としている。
- 2 本学部は、この目的を達成するため、以下の中期目標を設定した。まず、(1)教育の成果では、①個別の分野を超えた幅広い人文学的素養を身に付けた人材を育成し、②人文学の専門的知識を身に付けた人材を育成し、③現代社会、国際社会の中で使命を果たし得る人材を育成すること、(2)教育内容では、①アドミッション・ポリシーの周知・徹底を通して、人文学的知を求め、社会との交流を重視し、文化の創造を目指す人材を広く受け入れ、②専攻分野教育を充実し、学府教育との連携を図ること、(3)教育方法では、①専門分野を超えた一学部一学科（人文学科）に相応しい教育を実施し、②シラバスを充実させること、(4)進路・就職の状況では、学部単位の広範な支援体制を確立することである。
- 3 本学部は、専門分野の枠を超えた一学部一学科（人文学科）からなる。
- 4 1で記した教育目的を実現するため、本学部は、次の三つの資質——①言葉への強い興味、とりわけ、文学作品や古典に対する感受性、②人間への飽くなき好奇心と、「私とは何か？」という真摯な問いかけ、③文化・歴史・社会といった、世界の多様性への開かれた関心——を備えていることを、受験生に求めている。このアドミッション・ポリシーの下、センター試験と個別学力検査を通して、思考力と記述・表現能力のある志願者を受け入れてきた。そして、真の人文学的教養と知性を身につけて研究や仕事の場でそれを存分に発揮しうる人材を育成するという基本方針の下、全学教育（コアセミナー等）と、文学部コア科目（人文学科基礎科目、人文学科共通科目「人文学」等）、専門分野の講義・演習、卒業論文指導等によって編成される専攻教育との連携のとれた教育活動を行っている。
- 5 本学部では、4年間の勉学の集大成としての卒業論文を重視し、成績評価についてはシラバスに記された成績の評価方法に従い、単位認定については教授会で行うという基本方針の下で、学位を授与している。卒業生は、約2割が大学院進学、研究生として大学に残り、その他はサービス業、製造業、金融・保険業、教員、公務員という進路をとっている。
- 6 本学部では、現在、これまでの自己点検・評価活動で明らかになった「優れている点」の向上と「改善を要する点」の解決のために、特に次のことの推進に取り組んでいる。①大学説明会や出張講義の推進、②教育の実施体制及びカリキュラムの継続的な見直し・改善（特にコア・カリキュラム）、③4年間の一貫した教育体制を視野においた教育、④学習・生活・就職での支援体制の充実、⑤FD体制の進展、⑥センター試験の配点の見直し、⑦教育の効果を検証する際の効果的な仕組みの構築、⑧採択された21世紀COEプログラム等の競争的資金獲得を通じての学習・教育の改善。
- 7 これらの取り組みにより、本学部の教育目的は概ね優れた形で実現されているが、今後も引き続き、6で記したことの改善・向上を図っていく。

[想定される関係者とその期待]

本学部では、1. 2. の教育目的及び中期目標に基づき、4. で述べたようなアドミッション・ポリシーの下で学生を受け入れ、入学後も適切なカリキュラム編成に基づいて教育を実施し、その成果を社会に還元している。こうしたことから、在校生・受験生及びその家族、卒業生、卒業生の雇用者等、及び地域社会等の様々な関係者から、人文学的教養と知性を備え、適切な思考力と表現力、総合的なものの見方を身につけた人材を育成することが期待される。

II 分析項目ごとの水準の判断

分析項目 I 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

本学部は、人文学科1学科であるが、資料1-1-Aが示すとおり、人文学科は哲学・歴史学・文学・人間科学の4コースに分かれ、さらにこれらのコースは合計で21の専門分野を有しているため、多様で幅広い人文学の教育を行うことが可能である。したがって、人文科学としての幅広い教養の修得や多様な人材の育成といった本学部の教育目的を達成する上で適切なものとなっている。

資料1-1-A 人文学科のコース構成と教育目的

コース名と教育目的	専門分野
1. 哲学コース 東西の文化的伝統の中で人類が生み出してきた様々な精神的所産を厳密かつ正確に読解し、また、自ら思索することを通して真理の探求を行い、現代社会の様々な諸問題に対して根源的な考察を提示できる人材を養成する。	哲学・哲学史 倫理学 インド哲学史 中国哲学史 美学・美術史
2. 歴史学コース 特定の地域と時代における社会の特質と相互間の共通性を、批判精神をもって実証的に、また理論的に解明し、独自の視点から、ある特定の地域と時代の社会像の復原ができる人材を養成する。	日本史学 東洋史学 朝鮮史学 考古学 西洋史学 イスラム文明学
3. 文学コース 古典から現代までの具体的かつ多様な文学作品や言語に関する文献を精査解説し、言語そのものについて、あるいは作品の背景をなす文化、さらには文学そのものについて省察できる人材を養成する。	国語・国文学 中国文学 英語学・英文学 独文学 仏文学
4. 人間科学コース 人間の行動や心理、および個人と社会の相互作用に関心を寄せ、人間・社会研究の視点から現代社会のさまざまな現象を包括的に把握して、産業化、情報化、高齢化、国際化などをめぐって生じる問題の解決ができる人材を養成する。	言語学・応用言語学 地理学 心理学 比較宗教学 社会学・地域福祉社会学

<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/index.html>

コース別の学生定員ならびに現員は資料1-1-Bのとおりであり、充足率は適正な範囲にある。

資料1-1-B コース別学生定員および現員

	平成16年			平成17年			平成18年			平成19年		
	定員	現員	充足率	定員	現員	充足率	定員	現員	充足率	定員	現員	充足率
哲学コース		59	112.1%		51	109.2%		56	108.5%		55	109.4%
歴史学コース		144			126			112			115	
文学コース		138			148			145			144	
人間科学コース		199			191			194			202	

専門分野未決定者		173			179			183			180	
計	636	713		636	695		636	690		636	696	

文学部における専任教員数の配置状況を資料1-1-Cに示す。この資料が示すように大学設置基準を満たしている。専任教員数及び非常勤講師数は資料1-1-Dのとおりであり教育課程の遂行に必要な教員は確保されている。また、各コースの責任部局は次の資料1-1-Eのとおりである。担当教員が二つの異なる研究院に所属しているが、研究院とは独立した文学部独自の教授会を毎月1回以上開催し、教育活動に係わる重要事項を審議しており、教員組織は適切に編成されている。

資料1-1-C 文学部における専任教員の配置状況（平成19年5月1日現在）

担当学部区分	学 科 等	教授	准教授	講師	助教	計	大学設置基準上の必要教員数
文学部	人文学科	31	21	4	0	56	11

資料1-1-D 文学部における専任教員数及び非常勤講師数（平成19年5月1日現在）

学士課程 （担当学部区分）	教授	准教授	講師	助教	准助教	助手	小計	非常勤講師	計	学生数	教員1人当たり学生数
文学部	31	21	4	0	0	0	56	93	149	696	4.67

資料1-1-E 各コースを担当する責任部局

コース名	責 任 部 局
哲学コース	人文科学研究院
歴史学コース	人文科学研究院
文学コース	人文科学研究院
人間科学コース	人文科学研究院、人間環境学研究院

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

（観点に係る状況）

本学部における教育上の課題は、教授会、学務委員会、カリキュラム委員会、自己点検・評価委員会、FD委員会などで扱われている。資料1-2-Aに示すように、これら委員会によって教育内容、教育方法の改善に向けた取り組みがなされ、その結果は適切に反映されている。

資料1-2-A 教育内容、教育方法の改善に向けた取組とそれに基づく改善の状況

教育上の課題を扱う体制	教授会、学務委員会、カリキュラム委員会、自己点検・評価委員会、FD委員会など。
改善に向けた実施体制と取組	①平成13年度設立のFD委員会のもとで学生による授業評価を毎年実施。授業評価の結果は担当教員に通知されるとともに、授業評価の結果に関するFDを毎年実施（文学部中期計画13・14・15）。 ②本学の教員業績評価の一環として平成18年5月には、人文科学研究院に教員業績評価委員会を設置し、教員自身による教育評価を実施。 ③カリキュラム委員会を中心としたカリキュラム、とくに文学部コアカリキュラムの見直し（文学部中期計画5、平成19年度計画5・6）。

改善の状況	<p>①授業評価の結果は、担当教員にフィードバックされ、授業改善に役立てられるとともに、教育体制や施設の改善にも役立てられている。</p> <p>②教員業績評価は現在試行期間中であり、本格的な改善状況の判明には至っていない。</p> <p>③平成 17・18 年度は全学教育科目の「コアセミナー」の実施体制を検討した。平成 18 年度は 8 クラス、平成 19 年度は 10 クラス設定し、文学部の大半の教員がそのいずれかのクラスを担当し、文学部 1 年次学生に対して人文学研究に必要なとされる基礎的能力の育成を行っている。このことによって、「コアセミナー」は専門教育への橋渡しの科目として機能している。また、平成 18 年度に「人文学」の改善を検討し、平成 19 年度より実施した。この結果、平成 19 年度より人文学科共通科目「人文学」を、哲学、歴史学、文学、人間科学の 4 コースに対応して I～IV に増設した。このうち「人文学Ⅱ：「近代日本の人文学」研究」は哲・文プロジェクトの研究成果を反映した内容となっている。</p>
-------	--

文学部における FD の開催回数・テーマ、全学 FD の実施と参加状況とそれぞれ資料 1-2-B、資料 1-2-C に示す。

資料 1-2-B 文学部における FD の開催回数・テーマ

平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
2 回（7 月・2 月）	1 回（7 月）	1 回（8 月）	1 回（9 月）
主なテーマ			
平成 16 年度	第 1 回：平成 15 年度授業評価アンケート・カリキュラム・教育体制に関する調査結果報告 第 2 回：「全学教育」をめぐる諸問題		
平成 17 年度	平成 16 年度授業評価アンケート・カリキュラム・教育体制に関する調査		
平成 18 年度	平成 17 年度授業評価アンケート・カリキュラム・教育体制に関する調査 文学部担当全学教育カリキュラムについて－「人文学入門」と「コアセミナー」－		
平成 19 年度	平成 18 年度授業評価アンケート・カリキュラム・教育体制に関する調査 平成 19 年度前期「現代文化論」に関する調査報告		

資料 1-2-C 全学 FD の実施と参加状況

	本学部教員の参加者数	テーマ
平成 16 年度	23 名	新任教員の研修、GPA 制度の導入に向けて、18 年度問題とその対応、大学院教育の新展開
平成 17 年度	4 名	新任教員の研修、大学評価を知る、TA のあり方
平成 18 年度	28 名	新任教員の研修、コアセミナーの目標と課題、GPA 制度が目指すこと
平成 19 年度	11 名	新任教員の研修、認証評価で見出された九州大学の教育課題と今後の対応

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部は、学生の定員充足率は相応で教員数も大学設置基準を十分に満たしており、教員組織も適切に編成されている。

本学部における教育上の課題は、教授会及び複数の委員会によって教育内容、教育方法の改善に向けた取り組みが行われている。とくに、授業評価と教育体制に関するアンケートとその結果を踏まえた FD が毎年実施され、また、全学教育との一貫性をも視野に入れたカリキュラムの改善が行われており、その結果、教育内容と教育方法の改善と向上に結びついている。

これらの取組は優れており、期待される水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本学部では、養成する人材像と学問分野・職業分野の特徴を踏まえて教育目的（前掲資料1-1-A）を設定し、資料2-1-Aのように教育課程並びに卒業要件を定め、授与する学位として学士（文学）を定めている。

資料2-1-A 九州大学文学部規則(抜粋)

- 第7条 文学部における教育課程(九州大学21世紀プログラムを除く。)は、全学教育科目及び専攻教育科目により編成するものとする。
- 第8条 全学教育科目に関する授業科目、単位数及び最低修得単位数は、別表第1〔略〕のとおりとする。(全学教育科目(37単位):教養教育科目(32単位)、文系基礎科目(4単位)、情報処理科目(1単位))
- 2 総合選択履修方式による全学教育科目及び専攻教育科目に関する授業科目、単位数及び最低修得単位数は、別表2〔略〕のとおりとする。(11単位)
- 3 専攻教育科目に関する授業科目及び単位数は、別表第3〔略〕のとおりとする。(80単位。卒業論文10単位を含む。)

本学部の教育課程では、全学教育科目と専攻教育科目を体系的に配置し、4年の一貫教育を実施している。そして、本学部の21の個別専門分野はそれぞれの研究史と学問原理に基づき、個々に授業科目を決定している。さらに、全学的な制度として「総合選択履修方式」が設定されている。これは、学問研究の急速な発展やその社会利用の多様な展開に対応して、学生の個性ある多面的な能力を柔軟に発揮させることを趣旨とする本学独自の方式で、これにより、学生は全学教育科目と他学部・他学科で開講される専攻教育科目の中から希望する科目を選択して履修することが可能である。

本学部では、①諸科目の体系的配置と②個別専門分野の特徴の重視という方針で教育科目を編成している。これを踏まえ、資料2-1-Bで示すような教育課程編成の特徴のもと、最低修得単位数を資料2-1-Cのように定めている。

資料2-1-B 各学科の教育課程編成・専攻教育科目の特徴

	教育課程編成上の特徴	専攻教育科目の特徴
人文学科	①全学教育科目と専攻教育科目との体系的配置 ②個別専門分野の独自性の重視 ③「総合選択履修方式」の積極的活用	①個別専門分野の研究史と学問原理の重視 ②先端的研究成果の授業への積極的な反映 ③卒業論文の重視 ④人文学的素養の幅広い修得(文学部コア科目)

資料2-1-C 全学教育科目と専攻教育科目の最低修得単位数配分

学科名	全学教育	専攻教育	総合選択履修	総単位数
人文学科	37単位	80単位(卒業論文10単位を含む)	11単位	128単位

資料2-1-Dに示すように、全学教育は「教養教育科目」と「基礎科目」から構成されている。上述したように、総合選択履修方式をとっていることから幅広く多面的な学修が可能となっている。また資料1-2-Aでも述べたように、本学部ではコアセミナーを専攻科目への導入科目として位置づけ、全学教育と専攻教育との連関を図っている。

専攻教育では、本学部の教育目的に沿って、資料2-1-Dに示すような授業科目を配置している。専門教育への円滑な橋渡しを目的として、主として1・2年生が履修する文

学部コア科目（人文学科基礎科目、人文学科共通科目、古典語、外国語）、4つのコースの科目を幅広く履修するコース共通科目、専門分野の特徴・性格に即した講義、演習、実験、実習等、多様な形態による授業を行う専門分野科目という特徴をもつ授業科目を配置し、体系的な科目編成の充実を図っている。

資料 2-1-D 科目構成

科目区分	科目名	各科目の目標・概要	必修・選択の別	
全学教育科目	教養教育科目	共通コア科目	市民的な生活のために必要となる基盤の形成	○ 2科目（4単位）全学部必修
	コアセミナー	大学での学びへの適応の促進、学習意欲の向上	○ 1科目（2単位）全学部必修	
	文系コア科目 理系コア科目	各分野の知識や見解がいかなる問題意識から形成され、その形成にどのような方法やものの見方が働いているかという学問のコアの理解	○ 文系コア科目は全学部とも3科目（6単位）選択必修 ○ 理系コア科目は文系学部3科目（6単位）、理系学部2科目（4単位）選択必修 ○ 高年次においても選択科目を配置	
	言語文化科目	国際社会を積極的に生きるために必要な、また、外国語運用能力を涵養・向上させ、異文化理解と国際的感覚、国際的教養の育成	○ 文系学部（21世紀プログラム）は第一外国語7科目（7単位）、第二外国語5科目（5単位）選択必修 ○ 理系学部は第一外国語6科目（6単位）、第二外国語4科目（4単位）選択必修 ○ 高年次において言語文化自由選択科目を配置	
	健康・スポーツ科学科目	健やかな人間性を有する人材の育成	○ 全学部とも1科目（2単位）必修 ○ 低年次、高年次に選択科目を配置	
	基礎科目	文系基礎科目	各学部・学科で専攻教育を学習する上で必要な科目	○ 文系基礎科目は、「現代社会／現代史」（2単位）を必修、1科目（2単位）を選択必修
		理系基礎科目		○ 文学部では履修要件としていないが、総合選択履修方式による修得単位とすることができる
		情報処理科目		○ 文学部は情報処理演習（1単位）必修
	総合選択履修方式		幅広い教養を養うため、他学部・学科で開講されているすべての授業科目も履修できる方式	○ 文学部では総合選択履修方式により11単位以上を修得
	専攻教育科目	文学部コア科目	人文学科基礎科目、人文学科共通科目「人文学Ⅰ～Ⅳ」、古典語および外国語科目	文学部全体の共通科目で、人文学のコア部分を構成する科目で、人文学の基礎を学ぶ
コース共通科目		史学概論、人間科学統計入門、言語学概論等	4つのコースごとに設けられているコース共通の科目	○ 8単位選択必修
専門分野科目		専門に関する講義・演習・講読・実習等	21の専門分野ごとに開講される講義・演習・実習等の科目	○ 26単位選択必修

自由選択科目	上記以外の科目		○ 27 単位選択
卒業論文		文学部での学習の集大成	○ 10 単位必修

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本学部では、平成 14 年度以降毎年 FD 委員会によって学生による授業評価及び教育体制に関するアンケートを実施し、学生から寄せられた意見を関連委員会に検討依頼して学生からの要請に積極的に対応するとともに、平成 14 年度以降隔年で卒業生やその就職先にもアンケート調査を実施し、社会からの要請にも応えて教育内容の改善を図ってきた。

これらの要請を踏まえて、本学部では、資料 2-2-A に示すような取り組みを行っている。平成 19 年度から導入された GPA 制度や英語標準化テストの実施とともに、以下の 4 つの取り組みが重要である。①自由選択科目の設定、②3 年次編入学試験（学士入学）の実施、③修士課程教育との連携、④社会調査士・認定心理士の資格取得のための科目設定。

資料 2-2-A 学生のニーズ、社会からの要請等に応じた教育課程の編成

	教育課程上の取り組み	概要
全学教育	① GPA 制度の実施	当該制度は、教育の質、卒業生の質を保証し、単位の実質化に繋がる効果を生むと期待され、高等教育に対する社会からの説明責任に対応できるシステムとして導入した。
	② 放送大学との単位互換制度	放送大学からの成績報告に基づき、2 科目 4 単位までを本学の全学教育総合科目として認定する。
	③ 外国語検定試験による単位の認定	TOEFL、TOEIC を対象に、その検定試験の結果に基づき、言語文化研究院の教員による書類審査などが実施されて、単位認定が行われる。
	④ 英語標準化テストの実施	TOEFL-ITP (TOEFL 団体用テスト) を統一テストとして実施し、学生の英語力を測定し、そのスコアに基づいて習熟度別クラス (英語ⅢA) を編成する。
総合選択履修方式		全学教育科目及び専攻教育科目 (6 単位を限度) のうちから 11 単位以上。
文学部	① 自由選択科目の設定	専攻教育科目 80 単位のうち、27 単位を自由選択科目とし、他学部の授業科目の履修を可能としている。
	② 編入学試験 (学士入学)	3 年次編入学試験を実施し、編入学者の既修得単位については別途認定を行っている。
	③ 修士課程教育との連携	大学院人文科学府の共通科目「西洋古典文学特論」を「西洋古典学講義」として文学部学生にも開講している。
	④ 社会調査士・認定心理士の資格取得のための科目設定	教員・学芸員の免許取得のための科目の他、財団法人社会調査士資格認定機構が授与する社会調査士資格 (平成 14 年度)、日本心理学会が認定する認定心理士資格 (平成 18 年度) を取得するための科目を設定した。

さらに本学部では科目等履修生等も積極的に受け入れており、それらの在学状況は資料 2-2-B のとおりである。

資料 2-2-B 科目等履修生等の在学状況（平成 19 年 5 月 1 日現在）

種 類	説 明	平 成 16 年	平 成 17 年	平 成 18 年	平 成 19 年
研究生	学士の学位を有する者又はこれと同等以上の学力があると認められる者で、学部において、特定の専門事項について研究することを志願する者（外国人留学生も含む）。	9	14	5	5
専修生	高等専門学校もしくは教養課程を卒業もしくは修了した者またはこれと同等以上の学力があり、かつ、学部において適当と認められた者で、学部において、特定の専門事項について研究することを志願する者。	2	0	0	0
聴講生	本学において、学部で開講する特定の授業科目を聴講することを志願する者。	17	16	10	13
特別聴講学生	他の大学または外国の大学の学生で、本学において、学部で開講する特定の授業科目を履修することを志願する者。	4	5	2	10
科目等履修生	本学の学生以外の者で、学部の授業科目のうち一又は複数の授業科目を履修することを志願する者。	1	0	0	0
留学生	留学の目的をもって日本に入学した外国人または入学しようとする外国人で出願資格に該当する者。	15	11	10	8
合 計		48	46	27	36

以上のほかに、本学部では、法人化以降、ホームページをリニューアルし、高校生向け案内パンフレットの内容を充実させ、それを持参して福岡市及びその近郊の高校訪問を実施し、出張講義にも積極的に応じるなど、社会に対して文学部の教育内容に関する広報活動を積極的に行っている。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部では、人間の学、批判と創造の学としての人文科学を教育するという4年の教育課程を編成し、全学教育と連携した体系的な授業科目を配置しており、教育課程の編成は適切である。また、学生や卒業生等に対して継続的に実施されているアンケート調査の結果を教育課程や教育内容の改善に反映させるとともに社会に対する広報活動も積極的に行っており、学生の多様なニーズや社会からの要請等に適切に対応している。

以上の取り組みは優れており、期待される水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本学部では教育方法(前掲の資料2-1-A)に従い、多様な専門分野の特性に応じて、「専攻教育科目」では、講義・演習・講読・実習を教育目的に沿う形で配置している(資料3-1-A)。

教員数に比して講義の数が多く1講義当たりの学生数が少ないことが特徴であり、このことから、講義においても一方向型ではなく、学生の積極的な授業参加を図っている。演習および実習はフィールドワークを含み、専門分野に応じて多彩な授業形態を取り入れ(資料3-1-B)、さらに演習においては、概ねTAを活用した、少人数授業が実現されている。

資料3-1-A 学部教育科目の授業形態別開講数(平成19年度実績)

講義	少人数セミナー	演習	実験	実習	その他 (左記分類に該当しない特殊な授業形態)
258	0	175	6	36	0

資料3-1-B 授業形態上の特色

授業形態	特色
講義	学生数20~30人の少人数授業が特徴。このことを活かして、メールによる課題提出、小試験、ミニレポート、発表、ディスカッション等を試みている授業もある。
演習	原典や資料の輪読、輪番による発表、グループワーク、グループ発表、討論などを行っている。
講読	地理学講読I~XII、考古学講読I・IIでは英語、仏語、独語等の専門書を輪読する。
実習	地理学実習I~III、考古学実習I・II、美学美術史実習I・IIでは、野外調査、発掘、美術館等でのフィールドワークを実施している。情報機器や映像資料も活用されている。
実験	心理学初級実験I~IVでは心理学で用いられるさまざまな実験が行われている。

担当授業科目に関しては、教授・准教授は主要授業科目を含めた全ての科目を、講師・助教・非常勤講師は主要授業科目以外の科目を担当している。

シラバスの作成及び改善については、シラバス委員会を設置して種々の改善を試みた結果、平成16年からウェブシラバスを導入した。統一された様式に則って、「授業目的」「授業内容」「授業方法」「成績評価方法」等の項目が記載され、ウェブ上で公開されている。平成17年度の学生アンケートでも、ウェブ上でシラバスと時間割を確認できることを評価する声が多数見られた。ウェブ・シラバス(<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/cgi-bin/syllabus/index.htm>)の例を資料3-1-Cに示す。

資料3-1-C シラバスの共通記載項目(平成19年度)

基準掲載項目	記載例等
授業科目区分	専攻科目
授業対象学生及び学年等	2年生 3年生
授業科目コード	07052613
授業科目名	言語学・応用言語学講義 II
講義題目	日本語研究の基礎構造

授業方法及び開講学期等	後期・通常、 火曜2限
単位数	2単位
担当教員	准教授 上山あゆみ
履修条件	特になし
授業の概要	文の構造というものは、研究が進むにつれて新しい側面が明らかになっていくものであるから、定まった1つの答えがあるわけではないが、ある程度、衆目の一致する面もある。この授業では、具体的にいろいろな日本語の文を取り上げ、その構造について、どういう点をおさえておかなければならないかを議論する。受講学生の制限はないが、授業の主たるターゲットとして、言語学・応用言語学専攻の2・3年生を想定している。
全体の教育目標	(1) 全般的な教育目標： 日本語の基本的な構文ならば、大体の構造図が書けるようになることが目標である。
個別の学習目標	(2) 個別の学習目標： 1. 文法と文の構造 2. 術語と項の関係 3. 単文と複文 4. 修飾関係 5. 主題と述部の関係 6. さまざまな副詞表現 7. スコープ 8. QR(Quantitative Raising: 量化詞繰上げ) 9. 連動読み 10. かきまぜ構文 11. さまざまな構文
授業の進め方	まず、予習課題として、授業内容と関連する例文を自分で考え、その構造について考えてきてもらう。そこで提出された例文に言及しながら、授業では、当該構文の構造について議論していく。 文の構造図は、自分で書いてみて初めて、様々な細かい点に注意を向けることができるようになる。この授業では、毎授業の開始時に、復習テストとして構造図を書く練習をしてもらい、そこであらためて出てきた疑問点にも答えていく。この復習テストは出欠確認を兼ねており、細かい得点化はしないが、よっぽど出来の悪いものは区別したいと思っている。 また、最低1本のレポートを仕上げ提出することを単位認定の条件の1つとする。冬休み前に課題を提示するので、レポートでは、その構文の構造図はどのようなものか、理由をつけて説明した上で、結論としての構造図を書いてもらう。
教科書及び参考図書	<教科書> 授業の際にプリントを配布する。 <参考図書> (授業のバックグラウンド的な内容のもの) ▪ 上山あゆみ (1991) 『はじめての人の言語学 ～ことばの世界へ』 くろしお出版。 ¥2300。 ▪ 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門 ～ことばのしくみを考える』 スリーエーネットワーク。 ¥1800。 (授業よりも進んだ内容のもの) ▪ 郡司隆男 (2002) 『単語と文の構造』 現代言語学入門3、岩波書店。 ¥3200 ▪ 北川善久・上山あゆみ (2004) 『生成文法の考え方』 研究社。 ¥2800
学習相談	質問もしくはアポイントメントの希望があれば、随時メールで連絡してもらえばよい。また、言語学研究室のSA (Study Advisor) の制度も十分に活用

	してほしい。
試験・成績評価の方法等	学期末試験は課さない。 単位は、予習課題・復習テスト・レポート等の提出物に基づいて判定する。 課題の提出状況とその時点での暫定的な予想評点を表にして公開するので、 気になる人は、授業終了時に参照して対策を相談してほしい。
その他	主に2・3年生を想定しているが、受講学生の制限はしない。連絡事項や細かいことはホームページに掲載するので、頻りにチェックしてほしい。

専門分野の決定した第2学年次以降の学生については、各専門分野において、教員とTAとが協力し、授業時間の内外を通して学習指導と助言を行っている。TAは、文学部・人文科学府併せて毎年40～50名採用され、3,000～4,000時間もの授業の補助（演習や実習の補助、機器等の準備、予習の指導等）に従事している。TAの採用状況は資料3-1-Dが示すとおりである。

資料3-1-D TAの採用状況

年 度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
TA採用数(延べ人数)	49	48	53	54

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

本学部では、全学教育科目である「コアセミナー」を過半数の教員が担当し、1年前期の学生の自主的な学習を促し授業時間外の学習時間を確保するために積極的に活用している。専門分野が決定する2年前期以降は、演習・実験・講読等を通じて、日常的に教員や大学院生・上級生等による懇切な指導・助言が行われる。資料3-2-Aのように、学生からの相談に応じるため全教員がオフィスアワーを設け、ホームページを通じ学生に周知している (<http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/officehour.html>)。

資料3-2-A 文学部教員の平成19年度オフィスアワー一覧

専門分野	実施教員	実施曜日及び時間
哲学・哲学史	谷 隆一郎 教授	前学期：火(16:30～17:30), 金(16:30～17:30)
		後学期：火(16:30～17:30), 金(16:30～17:30)
	円谷 裕二 教授	前学期：金(16:30～18:00) 要予約(他時間の予約も可)
		後学期：金(16:30～18:00) 要予約(他時間の予約も可)
	菊地 恵善 教授	前学期：木(15:00～16:30) 要予約
		後学期：木(15:00～16:30) 要予約
倫理学	細川 亮一 教授	前学期：月(16:40～18:10)
		後学期：月(16:40～18:10)
	宮島 磨 准教授	前学期：月(18:10～18:30) 要予約
		後学期：月(18:10～18:30) 要予約
	吉原 雅子 講師	前学期：金(14:30～16:30) 要予約(他の時間帯の予約も随時対応)
		後学期：金(14:30～16:30) 要予約(他の時間帯の予約も随時対応)
インド哲学史	岡野 潔 教授	前学期：火(18:10～20:30)
		後学期：火(18:10～20:30)
	片岡 啓 准教授	前学期：木(15:00～16:00)
		後学期：木(15:00～16:00)

中国哲学史	柴田 篤 教授	前学期：火（16:30～19:00）、金（17:00～19:00）
		後学期：火（16:30～19:00）、金（17:00～19:00）
	南澤 良彦 准教授	前学期：木（15:00～17:00）
		後学期：木（15:00～17:00）
美学・美術史	後小路 雅弘 教授	前学期：木（10:20～11:20）、金（14:00～15:00）
		後学期：木（10:20～11:20）、金（14:00～15:00）
	井手 誠之輔 教授	前学期：金（10:30～12:00）
		後学期：金（10:30～12:00）
	京谷 啓徳 准教授	前学期：金（13:00～15:00）
		後学期：金（13:00～15:00）
東口 豊 講師	前学期：金（12:15～13:00）	
	後学期：金（12:15～13:00）	
日本史学	坂上 康俊 教授	前学期：サバティカル期間中につき、実施しない
		後学期：サバティカル期間中につき、実施しない
	佐伯 弘次 教授	前学期：火（14:50～16:20）、木（14:50～16:20）
		後学期：火（14:50～16:20）、木（14:50～16:20）
	岩崎 義則 准教授	前学期：火（13:00～16:20）、金（13:00～14:30）
		後学期：火（13:00～16:20）、金（13:00～14:30）
山口 輝臣 准教授	前学期：金（13:00～14:30）	
	後学期：金（13:00～14:30）	
東洋史学	川本 芳昭 教授	前学期：木（16:30～17:00）
		後学期：木（16:30～17:00）
	中島 楽章 准教授	前学期：火（10:15～11:45）
		後学期：火（9:30～11:00）
朝鮮史学	濱田 耕策 教授	前学期：水（13:00～17:00） 第1水曜日（教授会開催日）を除く
		後学期：水（13:00～17:00） 第1水曜日（教授会開催日）を除く
	森平 雅彦 准教授	前学期：火（14:50～16:20） 他随時受付（要予約）
		後学期：火（14:50～16:20） 他随時受付（要予約）
考古学	宮本 一夫 教授	前学期：随時
		後学期：随時
	辻田 淳一郎 講師	前学期：随時
		後学期：随時
西洋史学	神實 秀夫 教授	前学期：月・火（16:30～18:00） 要予約
		後学期：月・火（16:30～18:00） 要予約
	山内 昭人 教授	前学期：金（12:00～13:00） その他随時対応
		後学期：金（12:00～13:00） その他随時対応
	岡崎 敦 准教授	前学期：月・火（12:00～13:00） その他随時対応（要予約）
		後学期：月・火（12:00～13:00） その他随時対応（要予約）
イスラム文明学	清水 宏祐 教授	前学期：水（11:00～13:00）
		後学期：水（11:00～13:00）
	清水 和裕 准教授	前学期：火（16:30～18:00）
		後学期：火（16:30～18:00）
地理学	高木 彰彦 教授	前学期：月（13:00～14:30）
		後学期：月（15:00～16:30）
	遠城 明雄 准教授	前学期：月（10:30～12:00）
		後学期：月（10:30～12:00）

国語学・国文学	今西 裕一郎 教授	前学期：火・木（14:30～17:00） 他の時間希望の場合は要事前連絡
		後学期：火・木（14:30～17:00） 他の時間希望の場合は要事前連絡
	高山 倫明 准教授	前学期：火（13:00～14:30）
		後学期：火（13:00～14:30）
	辛島 正雄 准教授	前学期：月（13:00～14:30）、金（14:30～16:00）
		後学期：月（13:00～14:30）、金（14:30～16:00）
中国文学	竹村 則行 教授	前学期：火・金（13:00～14:00）
		後学期：火・金（13:00～14:00）
	静永 健 准教授	前学期：月・金（15:00～17:00）
		後学期：月・金（15:00～17:00）
英語学・英文学	村井 和彦 教授	前学期：木（13:00～14:30） 要予約
		後学期：木（13:00～14:30） 要予約
	西岡 宣明 教授	前学期：火・水（13:00～14:30） 要予約
		後学期：火・水（13:00～14:30） 要予約
	鵜飼 信光 准教授	前学期：木（13:00～14:30）、金（13:30～14:30）
		後学期：木（13:00～14:30）、金（13:30～14:30）
高野 泰志 准教授	前学期：月・火（13:00～14:30）、金（14:50～16:20）	
	後学期：月・火（13:00～14:30）、金（14:50～16:20）	
独文学	浅井 健二郎 教授	前学期：火（15:00～16:00）
		後学期：火（15:00～16:00）
	小黑 康正 准教授	前学期：木（14:50～16:20）
		後学期：木（14:50～16:20）
仏文学	吉井 亮雄 教授	前学期：月・木（16:30～17:30）
		後学期：月・木（16:30～17:30）
	高木 信宏 准教授	前学期：火・木（16:30～17:30） 要予約
		後学期：火・木（16:30～17:30） 要予約
言語学・応用言語学	稲田 俊明 教授	前学期：木（13:00～14:30）
		後学期：木（13:00～14:30）
	坂本 勉 教授	前学期：サバティカル期間中につき実施しない
		後学期：月（14:50～16:20） 要予約
	久保 智之 教授	前学期：木（12:00～13:00） その他随時（要予約）
		後学期：木（12:00～13:00） その他随時（要予約）
上山 あゆみ 准教授	前学期：火（14:00～17:00）、木（14:00～17:00） 要予約	
	前学期：火（14:00～17:00）、木（14:00～17:00） 要予約	
社会学・地域福祉社会学	鈴木 譲 教授	前学期：木（12:00～13:00） 要予約
		後学期：木（12:00～13:00） 要予約
	安立 清史 准教授	前学期：月・火・水（12:00～13:00） 要予約（メール）
		後学期：月・火・水（12:00～13:00） 要予約（メール）
比較宗教学	關 一敏 教授	前学期：木（16:30～18:00） 要予約
		後学期：火（15:30～17:00） 要予約
	飯嶋 秀治 准教授	前学期：火・木（12:00～13:00） 要予約（メール）
		後学期：火・木（12:00～13:00） 要予約（メール）
心理学	箱田 裕司 教授	前学期：火（13:00～17:00）、木（13:00～14:30）
		後学期：火（13:00～17:00）、木（13:00～14:30）
	三浦 佳世 教授	前学期：月（13:00～14:00）、火（13:00～14:00）
		後学期：月（13:00～14:00）、火（13:00～14:00）

中村 知靖 准教授	前学期：火・木（13:30～14:30）
	後学期：火（15:30～16:30）、木（13:30～14:30）
光藤 宏行 講師	前学期：金（9:00～10:30、15:00～17:00）
	後学期：金（9:00～10:30、15:00～17:00）

履修指導および専門分野決定のためのガイダンスは、資料3-2-Bに示すように3回のサイクルで行っている。学生は全体説明を受けた後、各研究室を訪問し、より具体的な個別説明を受けられる。

加えて、一年次の学生に対しては、18年度から少人数のコアセミナーを開講し、きめ細かい学習指導を行っている。また専門分野未決定者を対象に学務委員会が中心となって履修相談を実施している。

資料3-2-B 履修ガイダンスの実施状況（平成19年度）

部局名	実施組織	実施時期	実施対象者	実施内容
文学部	学部	4月	1年	文学部新生ガイダンス
		9月	1年	文学部専門分野決定のためのガイダンス
		4月	2年	新2年生オリエンテーション(専門分野が決まった学生向け)
	専門分野ごと	4月 9月	1年・2年	専門分野における授業科目ガイダンス(上記の全体ガイダンス終了後に専門分野ごとのガイダンスが実施される)

全学教育においては、時間割に指定された科目以外は原則履修できないシステムを採用し、実質上の履修単位のキャップ制を実施している。さらに、平成19年度よりGPA制度を導入し、選択科目の履修登録を慎重にさせることにより履修科目を自主的に学習させる体制を整えた。

学生の自主的な学習を支援するため、資料3-2-Cに示すように、自習室および情報機器室の整備等が行われている。

資料3-2-C 自習室・情報機器室の整備状況

部局名	自習室	情報機器室
文学部	○専門分野（研究室）ごとに設けられている演習室（部屋数：21、机数：多数） ○文学部学生支援室（机3、椅子9）【4台】（利用時間は9:00-17:00）	○各研究室において必要な情報機器が整備されている。 ○演習棟307演習室【6台】

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部の教育目的を達成するために、講義、演習、実験、実習等の授業形態がバランス良く組み合わせられており、それぞれの教育内容に応じた学習指導法の工夫も適切になされている。また、教育課程の編成の趣旨に沿って適切なウェブシラバスが作成され、広く活用されている。

また、コアセミナーの積極的活用やオフィスアワーの設定などにより、学生の主体的な学習を促す取組も適切に行われている。

以上の取組や活動の状況は優れているため、教育課程を展開するにふさわしい授業形態、

学習指導法等の整備に関して、期待される水準を上回ると判断される。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

本学部の単位取得状況は、資料4-1-Aが示すとおりである。単位取得率は1、2、3年は高い水準で推移しており、平成16年度に低かった4年生の取得率も年々改善している。また、資料4-1-Bが示すとおり、留年率、休学率とも極めて低率である。これらのことから、各学年時において学生は学力を順調に身に付けていると判断される。

資料4-1-A 単位取得状況

年度	平成16年度			平成17年度			平成18年度			平成19年度			
	履修登録者数	単位取得者数	単位取得率	履修登録者数	単位取得者数	単位取得率	履修登録者数	単位取得者数	単位取得率	履修登録者数	単位取得者数	単位取得率	
文学部	1年	4249	3989	93.9	4344	4001	92.1	4465	4271	95.7	4245	4118	97.0
	2年	4523	3971	87.8	4657	4220	90.6	4670	4128	88.4	4400	4029	91.6
	3年	4315	3371	78.1	3829	3127	81.7	3962	3380	85.3	3792	3252	85.8
	4年	2518	1314	52.2	2386	1262	52.9	1870	1127	60.3	499	247	49.5
	全体	15605	12645	81.0	15216	12610	82.9	14967	12906	86.2	12936	11646	90.0

※履修登録者数・単位取得者数ともに延べ人数、単位取得率：単位取得者数を履修登録者数で割った比率

資料4-1-B 留年・休学状況（5月1日現在・表示例）

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
留年者数（留年率）	71(0.10)	49(0.07)	52(0.07)	49(0.07)
休学者数（休学率）	19(0.03)	6(0.01)	15(0.02)	16(0.02)

※ 留年者数：正規修業年限を超えて在籍している学生数、留年率：留年者数を在籍学生数で割った比率

修了者の修業年数別人数、学位授与状況は、それぞれ資料4-1-C、Dで示すとおりである。学生は4年間で順調に学力や能力を身に付けて卒業している。

資料4-1-C 修了者の修業年数別人数（人）

修業年数	文学部			
	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
4年	139	133	130	135
5年	19	13	15	17
6年	7	6	2	1
7年	2	2	1	1
8年以上	1	1	2	1
その他（編入学など）	1	0	0	0
合計	169	155	150	155

資料 4-1-D 学位授与状況 (人)

学位	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
学士 (文学)	169	155	150	155

また、資格取得の状況として、教育職員免許状・社会調査士・認定心理士の取得状況を、それぞれ資料 4-1-E に示す。多くの学生が教員免許を取得しており、教育研究指導が高い質で行われていることを示している。

資料 4-1-E 教育職員免許状などの取得状況

取得資格	平成 16 年度	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
教育職員免許状 (中学校専修)	10	5	7	15
教育職員免許状 (高等学校専修)	37	35	22	31
社会調査士	4	11	17	16
認定心理士	-	-	-	-

さらに、資料 4-1-F は、卒業論文が学会誌に掲載された事例のいくつかを示したもので、このことから、本学部の教育研究指導水準の高さと学生が身に付けた学力の高さがわかる。

資料 4-1-F 学会誌に掲載された卒業論文の例

学生	卒業年	論文名	学会誌名・巻・号・頁	学会名等	掲載年月
学生 A	2004 年	前漢における中央監察の実態	東洋学報 88-2, 33-63	東洋文庫	2006 年 9 月
学生 B	2004 年	延岡市における企業城下町の体質の変容－地方自治体の産業政策の転機を事例として－	経済地理学年報 53-3, 29-45	経済地理学会	2007 年 9 月
学生 C	2005 年	屋久島への I ターン移住における仲介不動産業者の役割	人文地理 58-5, 43-56	人文地理学会	2006 年 10 月
学生 D	2007 年	土師器食膳具から見た中世博多の土器様相－博多遺跡群の土師器編年－	九州考古学 82, 21-43	九州考古学会	2007 年 7 月

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

学業の成果に関する学生の評価は、授業評価アンケートにより得られ、これらの結果から、満足度を評価するとともに、担当教員にフィードバックされて授業改善に役立てられる。授業評価以外に教育体制とカリキュラムに関するアンケートも毎年実施されており、その結果は学生支援室や網戸の設置、時間割やシラバスの改善等、教育改善のために活用されている。

平成 18 年度の授業評価アンケートは資料 4-2-A、B のような内容で実施され、67% の回収率があった。このうち、到達度や満足度を示す項目についての集計結果を、資料 4-2-C、D に示す。資料 4-2-C には平成 14 年度の項目で比較できるものを加えておいたが、平均値が上がっており、学生の授業に対する努力度が増していることが読み取れる。

資料 4-2-A 文学部授業評価アンケートの内容

目的	授業改善に役立てるため。
実施対象	文学部で開講した授業を受講した学生（回収数 1753、回収率 67%）
実施時期	平成 19 年 1 月
内容	学生の出席・努力状況 授業に対する教員の努力・工夫の評価 シラバス・成績評価の適切さ

資料 4-2-B 文学部授業評価アンケートの内容例（平成 18 年度）

この授業に対する、教員の努力・工夫・配慮等に満足していますか。該当する度合いを番号で選び、○をつけて下さい。 1（不満である） ---2---3（そこそこだと思う） ----4----5（十分満足している）
--

資料 4-2-C 文学部授業評価アンケートの結果（平成 18 年度抜粋）

調査項目		1	2	3	4	5	未記入	平均値
自分の努力に対する満足度（人数）	後期	100	395	765	328	159	6	3.03
教員の努力・工夫・配慮に対する満足度（人数）	後期	12	74	515	615	533	4	3.91
シラバスの書き方（人数）	後期	12	36	587	613	469	36	3.87
平成 14 年度アンケート：授業内容を理解するために努力をしたか（人数）	後期	316	415	385	117	26	0	2.3

※ 1は「不満である」、5は「十分満足している」に対応する。

資料 4-2-D 授業評価アンケートの結果（平成 18 年度抜粋）

自由記述
<ul style="list-style-type: none"> ・データに基づいて緻密な分析をするということを初めて経験し、新しい発見がたくさんあった。 ・教員の見解をふまえつつ授業を進めるのは良かった。 ・方法論も勉強できて、実際に授業中に自分たちで考えてみる、というのがすごくいいと思った。 ・学生が主導でプレゼンテーションをして、先生がアドバイスを与えるやり方をぜひ続けてほしい。 ・時間の許す限り学生の疑問に答えようとすることで我々の内容理解度が深まった。

学生から見た授業の満足度（教員の努力・工夫・配慮に対する満足度、シラバスの書き方）については、4「満足している」に近い評価が得られており、学業の成果・効果があがっていることが認められる。本学部の目的を達成する教育が行われていると考えられる。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

在学中の単位取得状況や修了時の学位授与状況は良好であり、教員免許の取得状況や卒業論文の学会誌への掲載等から、教育の成果や効果は大いにあがっている。

また、学生による授業評価の結果から、シラバスの書き方、教員の努力・工夫・配慮に

対する満足度が高く、教育の成果や効果が十分にあがっている。

以上の点から期待される水準を大きく上回ると判断される。

分析項目 V 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 卒業(修了)後の進路の状況

(観点に係る状況)

過去4年間における本学部における卒業後の進路状況は、資料5-1-Aが示すとおりである。また、就職状況を資料5-1-Bに、主な進学先・就職先を資料5-1-Cに示す。

就職状況の詳細をみると、サービス業、製造業、金融・保険業、教員、公務員と続いている。印刷や文化維持に関わる職種にも就職がみられることから(資料5-1-B)、「ことば」を重視し、多様性とその総合を図るという本学部の教育活動の基本姿勢が就職状況にも着実に反映されている。

資料5-1-A 卒業/修了後の進路状況

進路状況	平成16年度			平成17年度			平成18年度			平成19年度		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
大学院進学	15	11	26	19	17	36	15	9	24	8	12	20
大学学部												
就職	19	44	63	23	56	79	23	60	83	26	69	95
臨床研修医												
一時的就業												
その他	17	36	53	23	31	54	17	31	48	13	27	40
計	51	91	142	65	104	169	55	100	155	47	108	155

資料5-1-B 産業別・職業別就職状況(人)

就職状況			平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
就職者数(進学かつ就職した者も含まれる)			63	79	83	95
産業別	建設業		0	0	3	5
	製造業		15	16	10	16
	情報通信業		11	11	9	13
	卸売・小売業		5	4	8	6
	金融・保険業		7	15	9	22
	教育、学習支援業		6	17	9	5
	サービス業		10	6	14	12
	公務		3	7	13	10
	その他		6	3	8	6
職業別	専門的・技術的職業従事者	計	16	17	20	7
		科学研究者				
		技術者	12	9	13	3
		大学等の教員				
		高等学校等の教員	3	5	6	3
		保健医療従事者			1	
		その他	1	3		1
	事務従事者		19	27	23	49
	販売従事者		4	12	12	4
	その他		24	23	28	35

資料 5-1-C 主な就職先・進学先（過去 4 年間）

主な就職先	人数	主な進学先	人数
東京海上日動火災保険	6	九州大学人文科学府	63
日本生命相互保険会社	5	九州大学人間環境学府	17
コカコーラウェストジャパン	4	九州大学比較社会文化学府	16
西日本シティ銀行	4		
福岡空港ビルディング	4		
新日鉄ソリューションズ	3		
トヨタ自動車	3		

文学部の卒業生は、その約 2 割が大学院進学ないしは研究生として大学に残る。就職率は毎年 50% 前後と高いとは言えないが、これは上述の進学率の割合の裏返しである。

観点 関係者からの評価

（観点に係る状況）

文学部卒業生アンケート調査は、教育の成果や効果を調べることを目的に、平成 17 年 2 月と平成 19 年 8 月に九州大学文学部卒業生および大学院人文科学府修了生を対象に行われ、合計で 247 の回収（その内訳は学部のみ 139、学部と大学院 81、大学院のみ 25、未回答 2）があり回収率は 20.5% であった（資料 5-2-A）。就職先へのアンケート調査は九州大学文学部卒業生および大学院人文科学府修了生の評価を明らかにすることを目的として、平成 19 年 8 月に就職先企業・機関 60 の人事担当者を対象に行われ、22% の回収率があった（資料 5-2-B）。

資料 5-2-A 文学部卒業生アンケート調査結果（抜粋）

アンケート項目	5段階評価の平均値	
	平成14年度調査	平成19年度調査
専門科目の授業	3.7	4.1
専門科目以外の授業	3.6	3.8
研究活動	3.5	3.7
外国語の授業	3.3	3.4

※ 1が「全く役立っていない」、5が「多いに役立っている」として5段階評価を行った。

資料 5-2-B 就職先へのアンケート調査結果（抜粋、人数）

アンケート項目	1	2	3	4	5	平均値
ねばり強くものごとに取り組む態度	0	1	0	10	2	4.0
周りの人と協調してものごとに取り組む態度	0	0	2	8	3	4.1
責任感	0	0	3	8	2	3.9
習得した学問・知識を活かしてものごとに取り組む態度	0	0	8	5	0	3.4

※ 1は「劣っている・低い」、5は「優れている・高い」として5段階評価を行った。

資料 5-2-A から専門科目、専門以外の科目は役に立っているという結果が得られ、教育の成果が上がっていることを確認できる。また、資料 5-2-B から、卒業生は粘り

強くものごとに取り組むという点や、周りの人と協調してものごとに取り組むという点で高い評価を得ているし、習得した学問・知識を活かしてものごとに取り組む態度も相応の高さを示していることから、教育の成果や効果が上がっていると判断できる。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

過去4年間における学部卒業後の進学・就職状況は良好であり、多様な人材を育成するという点で教育の成果や効果があがっている。

本学部の教育目的である幅広い教養の習得および専門教育の実施については、卒業生から高い評価を得たし、本学部の卒業生の多様な人材の育成という点に関して、就職先から高い評価を得た。これらの結果から、本学部の教育目的は十分に達成されており、期待される水準を上回ると判断される。

Ⅲ 質の向上度の判断

①事例1 教育カリキュラムの継続的な改革とその成果の向上(分析項目Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ)

(質の向上があったと判断する取組)

本学部では、継続的に教育カリキュラムの改革に取り組んでいる。平成12年度からの文学部における「コアカリキュラム」開発以来、独創性の開拓という目的を一層進め、平成19年度には人文学科共通科目として「人文学Ⅱ」を開設した。また、全学教育との連携も積極的に進め、平成18年度に1年生向けに少人数の必修科目として新設された「コアセミナー」の積極的活用を図っている。この結果、従来より早い段階での学習への動機付けが可能となり、専門課程への移行がよりスムーズになった。さらに、財団法人社会調査士資格認定機構が授与する社会調査士資格、社団法人日本心理学会が認定する認定心理士資格を取得するための科目を設定して、社会および学生のニーズに対応しており、実践的な教育という側面でも大きく向上している。

②事例2 「教育関連の広報活動の向上」(分析項目Ⅱ)

(質の向上があったと判断する取組)

教育目的や教育内容について、受験生をはじめとする外部の関係者にも情報を公開する努力を、法人化以降、一貫して行なってきた。学部パンフレットの刊行、ホームページの立ち上げ及び内容の充実を図っている。

③事例3 「シラバス内容の向上」(分析項目Ⅲ)

(質の向上があったと判断する取組)

本学部では、他学部よりも比較的早い時期の平成16年度より、それまでの冊子に替えてWebシラバスを導入した。これにより、新学期開始以前からシラバスを見たいという学生からの要望に対応することを可能にただけでなく、学期中にもシラバスの内容が改善され、授業内容の実態をいっそう反映したシラバス作成が可能になった。また、成績評価基準を明確に記すなど、記載内容も毎年改善されている。

④事例4 「教育の成果や効果の水準の維持」(分析項目Ⅳ)

(高い質を維持していると判断する事例)

単位取得状況や学位授与状況は優れ、並びに、シラバスの書き方、教員の努力・工夫・配慮に対する学生の満足度は高い。また、高度な卒業論文が作成され、学会誌に掲載されている。したがって、教育の成果や効果は高い質(水準)を維持している。

⑤事例5 「卒業生、就職先等関係者からの高い評価」(分析項目Ⅴ)

(高い質を維持していると判断する事例)

学部卒業後の進学・就職状況は良好であり、多様な人材の育成という目的は達せられ、就職先からも高い評価を得ている。また、本学部の教育目的である幅広い教養の習得および専門教育の実施については、卒業生から高い評価を得ている。

したがって、教育の成果や効果は高い質(水準)を維持している。